

暗黒の淵

暗いかたまり

甲「先生、先日はありがとうございます。あの節、私は先生につきとばされた形となつて、いろいろと考えさせられました。三日間のご講演は、かえつて私一人のためであつたことがわかり、ありがとうございます。つきましては、私に一つのわからないものができましたので、わざわざ今日本部に参上いたしました。お邪魔でございましょうが、お聞かせくださいませ。」

乙「それはよく来しました。わからないこととは何事です？」

甲「それは、どうしたことでしょうか、私の胸底には、暗い一つの塊ができてきて、それが年々大きくなり、それがこみ上げてくる気がします。いくら除こうとしても除きません。これはいったいどうしてできたのでございましょうか。念仏申しても、お話聞いても、けつして無くならないこの暗い塊がどうしてできたのかと考えはじめたら、何も手につかないようになりました。どうしてできたのか教えてくださいませ。」

逆境

乙「それは面白いことを聞いて来しましたね。私はあなたのすべてを知っています。できるのが当然であります。」

甲「それはまたどうしてでございませうか。」

乙「私はいつも心の深い淵と言っています。その心の底の深い淵は私にもまたあるのです。」

甲「先生にもあるのですか。」

乙「あなたのよりも、もつと深く大きいかも知れません。」

甲「まあ！ そうですか。それはいつたい、どうしてできるのでございませうか。」

乙「奥さん、それは人間の苦悩や境遇がひき出したのです。もしあなたでも、順境から順境へ、幸福から幸福に暮してこられたら、あるいはできなかつたかも知れない。人の子は、生まれおちて漸く成長しはじめる時、人生の暗い場面は、子どもには見えなかつた。知らされなかつた。しかし成長するに従つて、だんだんと、自分にとつて嫌な者が現われてくる。嫌なことができてくる。一人前の人間として社会に立つて行かなくてはならなくなると、そこには、愛別離苦や、怨憎会苦や、複雑な複雑な闇が私たちをとりまいてくる。病の床に伏すこともあり、世の冷たい寒風に吹きさらされて泣かねばならぬこともあり、嫌でも応でも、重い足をひきずつて、だれにもたよらずに広野のような寂寞を歩まねばならぬ日もあります。わけて『四百四病の病より、貧ほどつらい病はない』と言いますが、貧しさの中で、いつもいつも頭を痛めねばならぬことと、家庭の人事関係で痛めつけられる心の痛手は、深い深い心の闇となつて残つてきます。こうした荒波にもまれた人の心は、けつして純ではあり得ません。無頼漢の兄を殺した弟の心情や、思い余つて姑を殺した嫁の心、そうした人たちの心のうちに動くものが、私たちにないと言えましようか。」

逆境に虐げられた人の心は、そしてその人相は、けつして高貴な方のようにはありません。あなたの心のうちの暗い塊、心の底の暗い淵は、実にこうした世の逆境からできたのです。」

甲「……………ああ……………わかりました。それでできたのでございますか。（彼女は涙しつつ）……………ありがとうございます。その原因がわかりさえすれば、それで私は救われます。そして先生にも、それがおありになることがわかります。私などよりも深いこともわかります。私どもはどう生きればいいのですか。」

いかに生きべきか

甲「この暗い心は無くなりません。」

乙「無くなりません。無くなるどころがもつと深くなるかも知れません。」

甲「どうすればいいのですか。」

乙「どうすることもできません。ただその闇に寂しさに堪えてゆくことが許されるだけです。」

甲「忍べとおっしゃるのですか。」

乙「この世ではただこの心の闇に堪え忍ぶことが許されるだけです。昨年の十月号『無碍道号』の闡光録を読みましょう。」

『私の心は暗くて暗くて困ります。どうしたら暗くなくなりましょうか。いつも朗かに暮らしたいのですが、信仰が浅いのでしょうか。と言う人がある。だが、心が定まらないのが問題であろうか。心が幽鬱なのが、寂しいのが。私はそれよりも、²もつと重大なことがあると思う。私を見てだれも暗いとは言わない。むしろ私がいると明るくなると言う。しかし当の私はいつとも憂鬱で、近う近来、明るく朗かであった日はない。そしてそれが年々深まってゆくようである。私はただ、その暗い憂鬱な心に堪えているだけである。

大きな願いを持った大石由良之助が、はたして朗かであったであろうか。四十七士が明るかつたであろうか。——これは譬えではあるが——法然、親鸞両聖人、その他の聖賢が朗かであったであろうか。明るかつたであろうか。そしてただ明るいのがそれだけでいいことなのであるか。動く世相をじつと眺め、自己自身をじつと内省して、明るいのが、朗かなのがほんとうであろうか。私はそうは思わない。

承元の法難に吉水の教団がばらばらになる時、打ち首に会うもの、流罪にされる者、真実は蹂躪されて、人間の醜悪なものが勝をしめてゆく時、真実をじつと守つて、死すら覚悟する時、はたして明るくて朗かであろうか。殉教の真理の使徒の心はいつも暗い、人間的幸福を犠牲にし、命さえ投げ出した人であつても。いつの時代でも、真実は必ず迫害せられる。真実を歩もうとすれば、必ず窮迫や貧困や苦しみがまつわりつく。それに堪えて歩みきるには強い力がある。問題はその力である。

願に生きる者も、思いは千々にくだける。深さの知れぬ憂苦はある。しかし、願と力とがその底に動く。念仏道を生きる者にも涙はある。如来の本願力が衆生の

ものとなつて金剛不壊の信力となる。この信力、一切の苦悩に勝ちつづけて、かえつて苦悩などのすべてが、信を培う縁となる。無碍道ということが、氷の上を玉を転がすようなものであるならば、無碍道の意味はありえない。人生は限りなき有碍である。人生が生死の苦海で、はてしなき有碍なればこそ、その中に開く無碍道に意義があるのである。』

まあこれくらいにしておきましょう。今のでたいがいわかつたであらうと思ひますが、念仏の人の心もまた暗いのです。しかし、その暗いままの中に、念仏の光はあるのです。それはただ、大地の上に住む者の約束として、一切の苦悩や暗さを一身に背負つてごまかさず、そらさず、じつと耐えて、如来大悲の心を心とする念仏の行者にのみ許されることであります。』

甲「よくわかりました。私の生きねばならぬ道は、ただお念仏しかなかったのです。いつも忍べ忍べと教えてくださいます意味がわかりかけてきました。私はこの心の暗さが念仏申せばなくなるのかと思つていました。たいへんに間違つていました。しかしなんだか胸が楽になつた気がします。』

乙「如来本願の不行のみが、劫初から尽未来際かけて、ただ一つ貫きます。この唯一絶対の真実行、すなわちお念仏のみが、末通つて亡ばぬ弘誓の船であります。『煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、念仏のみぞ、まことにておわします。』内にも外にも、さまざまな大波小波が、うち乱れて果てしがありません。その波を外にも内にもおこすまいとすることは徒勞であります。永遠の白道、お念仏の上に立つて、内と外とにおこる一切の明暗水火、さまざまの波をじつと凝視して生きるのです。衆生にあつては実在するかに見える念々の妄想は、如来の智慧先によつて転成されて、感謝と慚愧の内容となるであります。暗い底なき淵をたたえたままに、そこにおちつける世界があります。静かに一道の光に照らされて久遠の眞実を領解しつつ、生き上つてゆく生活であります。何よりも、現実の弘誓大船に乗托しきることが第一です。人生の意義も、苦悩の意味も、すべてがわかつてきます。』

甲「ありがとうございます。たいへん手問どりました。それでは昼席を聞かしていただきます。』